

+ 15 【みのむしこぞう】

〈児童虐待〉（じどうぎゃくたい）というのは、最近の話ではなくて、ぼくのこどものころは、日常茶飯事（にちじょうさはんじ）といってもいいくらいでした。

口べらしのために親が新生児を殺す〈間引き〉なんてものは、江戸時代の話ではなくて、貧しいぼくの村では、明治時代から昭和時代まで、ずっとあったのです。

あそこのおかみさん、またお腹がおおきくなるとおもっていると、おなかがちいさくなっても、赤ちゃんの姿が見えないということがあったのです。

また、幼いこどもが食べるものを与えられずに、死んでしまうこともたまにありました。

とにかく貧しいですから食べものが少ないときは、働き手が優先（ゆうせん）でした。

それに小さな子がわるさをしたときのお仕置きが、半端ではない家もありました。

わるさというのは、宿題をやらないことなんかでは決してなく、ひもじさのために家族の食べものや畑の野菜を盗んだりすることなのです。

そんなことをすると、火箸（ひばし）で尻を突き刺されたり、鉈（なた）で指を打ち砕かれたりします。

でもそういうことは、（他人事ではないから）村ではだれも告げ口したりはしません。

懐爺によると、そうしたことで死んだ、赤ちゃんや子どものおばけが【みのむしこぞう】なんだそうです。

「どうして、みのむしなんじゃ」

いつぞやぼくは、そうきいたことがありました。

「みのむしみたいに、蓑（みの）や藁（わら）や菰（こも）や簾（すだれ）や筵（むしろ）なんかを、ちゃんと身に付けていますからねえ」

「どうして、みにつけているんじゃ」

「おばけになっても、元の親に殺されたり傷つけられたりするのを、守りたいためです」

「あわれじゃのう」

ぼくは親に折檻（せっかん）されて、夜中に庭で泣きじゃくる小さな子どもの声を、きいたことがよくあります。

それでも生き延びた子どもはまだいいけれども、死んでしまった子どもは、ばけてでたくもなるでしょう。

「死んだ子はあわれですが、おぼけになった【みのむしこぞう】はあわれだなんて同情もしてられません。とんでもなくおそろしいことをやりますからね」

「そらあ、なんじゃ、なにをやるんじゃ」

懐爺は、いささか躊躇（ちゅうちょ）してから話し始めます。

「【みのむしこぞう】は子どもには危害（きがい）を与えません。狙うのは大人ばかり、しかも自分の子どもを邪険（じゃけん）にしている親ばかり。ふだんは大木にぶらさがっているだけの【みのむしこぞう】は、そういう大人が大木で雨宿りするのを待ちつづけ、好機到来しますと、相手の頭上に落下します。そして【みのむしこぞう】は、捕らえた獲物（えもの）を自分の殻（から）のなかに閉じ込めて、すこうしずつすこうしずつ食べていくのです」

その「すこうしずつ」という言い方が、なんともおそろしいかったものです。

「にげられないんか」

「どうやっても逃げられません」

懐爺は、断固としていいました。

懐爺が、【みのむしこぞう】の仲間におもえました。

「そのかぶりものを、きったりやぶったりしても、だめかのう」

「獲物は動けないから、そんなことはできません。いままで助けようとして【みのむしこぞう】を切ったり破った自警団（じけいだん）は何人もいましたが、みんな獲物そのものを切ったり破ったりしてしまって、助けたことになりませんでした」

「【みのむしこぞう】のもくてきは、ふくしゅうかのう」

「はい。【みのむしこぞう】は復讐の鬼ですね」

「ふくしゅうというもんは、くだらないものだ。そういったのは、かいじいだのう」

「くだらないとはいいませんでしたが、復讐というものは、後を引きま
すからね。要するに復讐の連鎖（れんさ）ということがありますから、
むなしなものだと、そういったはずですよ」

「そうだったのう。れんさとは、くさりだったのう。くさりはこまるの
う」

「金ちゃん、ちゃんと覚えているじゃないですか」

「おしはのう、かいじいのことばそのものよりも、かいじいのころそ
のものを、おぼえとるんじゃ」

「ああそれで、くだらないと。でも【みのむしこぞう】はそのうちでな
くなりますよ」

「どうしてじゃ」

「親が子を殺したり傷つけたりすることがない世の中がやってくれば、
【みのむしこぞう】の仇もいなくなるわけですからねえ」

「それは、むりじゃ」

「どうして無理なんですか、金ちゃん」

「そんなよのなかが、やってくるわけないからのう」

そう言ったのには理由があって、親はみんな子を自分が作ったものだ
と考えている、自分が作ったものだから自分で壊しても平気なんだ、と
おもわれたからです。

もし法律なんかで取り締まったり罰を与えたりしたって、そういう考
えがあるかぎり、【みのむしこぞう】がいなくなる世の中なんて、やっ
てはこないとおもわれました。

「やってきませんか」

懐爺はややしびしげにいいました。

「きませんのう」

ぼくもさびしげにいいました。

それからふたりして、【みのむしこぞう】の歌を作り、声を合わせて歌
いました。

みのむしこぞうあわれなり

みのむしこぞうあわれなり

すこうしずつすこうしずつ

いただきますいただきます
あわれなりみのむしこぞう
あわれなりみのむしこぞう
おやのないこはあわれなり
おやのないこはおにとなり
すこうしずつすこうしずつ
いただきますいただきます
ひとをくうのはあわれなり
おにとなるのはあわれなり
おにとならぬもあわれなり
まったくもってあわれなり
おやをくうこはあわれなり
こをくうおやもあわれなり
いんがはめぐりおやとこが
くいつくわれつあわれなり
あわれなりみのむしこぞう
むなしさゆえにあわれなり
みのむしこぞうあわれなり
きのうもあすもあわれなり
あわれなりみのむしこぞう
まったくもってあわれなり
みのむしこぞうあわれなり

だから現代でも、【みのむしこぞう】は、いるのです。

でも山奥でもないかぎり、大木がめっきり少なくなったし、あつたにしても何せ傘が百円で買える世の中になったので、大木の下で雨宿りする人などもいなくなって、【みのむしこぞう】の出番も、ほとんどなくなってしまっているだけのことなのです。